

特集

となりびと

隣人として共に生きる

The Young Women's
Christian Association

YWCA

12

DECEMBER
2025

No.789

〈第34総会期主題聖句〉

平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

〈ビジョン〉

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

〈ミッション〉

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉

キリスト教基盤 平和・環境 人権 セーフスペース

Since 1905
120th Anniversary



ただ"となりに"いること...それが
いちばん 大切な「隣人愛」かもしれない

多くの痛みを負い、 病を知っている主

日本基督教団牧師 刀^と祢^ね館^{だち}美也子

彼は軽蔑され、
人々に見捨てられ
多くの痛みを負い、
病を知っている。

イザヤ書53章3節

イエスの父
ヨセフはどこへ

旧約聖書のこの箇所は、イエス・キリストのことを預言していると考えられています。神から遣わされた存在なのに、人々に見捨てられて、侮辱を受け、苦しみながら死んでいく。まさにイエスの生涯と重なる姿が描かれています。

ただ私が以前から引っかかっていたのは、「病を知っている」という部分です。イエス自身は別に病氣だったわけではなく。確かに病氣に苦しむ人たちに寄り添って、その痛みを分かち合ったかもしれないけれど。でも、ふと思ったのです。そう言えば、イエスの父ヨセフはその後どうしたのだろうか。

マリアが結婚前にイエスを身ごもったのは、聖書には「聖霊（神の力）によって」とありますが、周囲からは「姦淫の罪」を犯したと見なされる事態でした。婚約者ヨセフはとまどい悩みながらも、最終的にはマリアとその子を受け入れ、主に示されたとおりにイエスと名付けます。ユダヤで父が子どもに名付けるとは、その子を確かに自分の子として認めることを意味します。

当時のユダヤ社会で、「姦淫の罪」を犯したとされる女性を受け入れることは決して寛容とはとられず、そのような夫や婚約者もまた「神に背く罪人」と見なされました。婚約者に裏切られた男に向けられる同性の友人たちの蔑みの目は、ユダヤ社会に生きる男性にとって耐えがたい屈辱であつただろうし、神への信仰を疑われることも、信仰深い人間にとって深く傷つかずにはいられなかったでしょう。

そして、その身に子を宿した女性と違って、男性は逃げようと思えば逃げられるわけです。現代の日本でもシングルマザーの貧困は深刻で、外国人労働者の女性が産んだ子を遺棄したという事件も

ありました。相手の男性はどこにいるのでしょうか？ 女性だけが望まぬ妊娠と、その結果を背負わされる、今も変わらぬ悲劇がマリヤにも起こり得たことを考えると、実にイエスがこの世に無事生まれてきた奇跡は、神の御心であつたとしても、ヨセフの選択なしにはあり得なかったことを思われます。

罪人として扱われ 屈辱を共に受ける

彼がマリヤと共に生きることによって被る不利益の大きさを考える時、彼が単なる優柔不断な優しいだけの男であると見なすことはできません。むしろ、自分の利害や名誉よりも、相手の置かれた絶望的な状況を見過ごすことができず、自分の庇護を必要としている、自分しか守ることのできない相手へ寄り添う生き方を選んだヨセフに、無私の愛の強さを感じずにはいられません。ヨセフにとって、マリヤと共に生きるということは、罪人扱いと屈辱を共に負うことでした。しかしヨセフは、それこそが神の御心だと受け止めて、引き受けたのです。

そしてイエスもまた、ヨセフのように、罪人と見なされている人々、彼らと付き合う人間もまた汚れたとされるような人々と共に生きる人生を歩みました。それこそが神の御心だと信じて。

イエスは 病を知っていた

マタイ福音書によれば、ヨセフはヘロデ王に命を狙われた幼子イエスを守るために家族でエジプトに逃げてしばらく滞在したこと、ルカ福音書によれば12歳になったイエスを連れてエルサレムに行ったことが記されています。しかし、その後ヨセフの消息は、聖書からプツリと消えます。

姦淫の罪を犯した罪人と見なされるマリヤと、マリヤが身ごもった血のつながっていないイエスを受け入れ、命がけで守り育てたヨセフが、イエスの12歳以降に登場しないのは、おそらくその後亡くなったからでしょう。その原因の可能性として最も高いのは病気です。昔は治療法も少なく、特に貧しい人々は、今なら治るような病気で苦しみ亡くなる人が

多かったことが、福音書を読んでもわかります。

12歳を過ぎて間もなくイエスは、病気に苦しむ父を、その父を懸命に看病する母を間近で見えた。そして父亡き後、女手一つでイエスと幼い弟妹たちを苦勞して育てねばならなかった母を、長男であるイエスは必死に支えて生きてきたのではないだろうか。当時、治らない病気に侵された人は罪人と見なされることが多く、また夫に先立たれた女性も社会の最底辺に置かれました。まさにイエスは「病を知っていた」、病人本人の苦しみだけでなく、その周りの家族の痛みも知っていた。だから、病に苦しむ人々の痛みに関身になって寄り添えたのかと合点がいった気がしたのです。

痛みを 知っているからこそ

そしてイエスが急に身近に感じられました。なぜなら私自身がまったく同じ経験をしているからです。

中学時代に父が不治の病にかかり闘病の末、亡くなりました。3人姉弟の一番

年上だった私は、自分の悲しみ以上に途方に暮れている母を支えざるを得ない状況に置かれました。それはつらく苦しい経験でしたが、その経験が今の自分につながっていることもまた事実です。

イエスは「神の子」「救い主」と言われますが、同時に人間としてこの世を歩まれた以上、その歩みには出会った人々とりわけ深くかわった家族の影響がないはずはありません。私たちもまた、神様の働きかけをリアルに感じるのには、具体的な人との関わりを通してではないでしょうか。聖書では影の薄い父ヨセフですが、イエスの人生に確かな足跡を残している。イエスは神様の愛を、きつとヨセフを通して実感したのだらうと思わされます。

神様の愛を伝えるためにこの世にいられたイエスが、軽蔑されたり、見捨てられたりする痛みや、病の苦しみを、身をもって知っていてくださるというのは、私たちにとって大きな慰めになるのではないのでしょうか。そしてイエスがそうであつたように、私たちもまた、自らの痛みを通して、他者の痛みを知るようにと呼びかけられているような気がします。

くとなりびと 共に生きていく



飲み物とお菓子で200円。遠方から訪れる人もいれば、通りすがりに立ち寄る人もいます

私も経験したことのない楽しさ、喜びを味わっています」。これこそが私たちの宝です。ゲストとスタッフが隣人として出会い、分かち合い、支え合う場として継続していることに感謝しています。

大阪YWCA「ラベンダー」

スタッフ一同

傾聴カフェ「ラベンダー」は大阪YWCAの傾聴力養成講座の修了生たちの「学びを生かしたい」という熱い思いと話し合いから生まれました。来年20周年を迎えます。

カフェは予約不要・どなたでもどうぞ、というスタイルです。ゲストには心ゆくまで話してもらい、スタッフは一人ひとりに寄り添い、ひたすら傾聴することを心掛けています。

毎月2回、大阪YWCAの一室で開催。くつろいで話せる場をつくるため、生花を飾り、挽きたての豆でコーヒーを、コロナ以前は手作りのクッキーを、といったおもてなしがゲストの「また来ます」という思いにつながり、今のカフェがあると思います。これまでのゲストは、20代から80代まで延べ1000人を超え、まさに老若男女が集う場になりました。

最近、新しい仲間からこんなことを言われました。「ゲストが絶えないのは、スタッフのボランティア精神が互いの信頼につながり、それがゲストにも伝わって相乗効果を生んでいるからでしょう。私も経験したことのない楽しさ、喜びを味わっています」。これこそが私たちの宝です。ゲストとスタッフが隣人として出会い、分かち合い、支え合う場として継続していることに感謝しています。

大阪
YWCA

出会いを大切に
ひたすら傾聴する



毎週金曜の午後、ボランティアが心を込めて作っています

答えた。しばらくしてリーダーは聖書の勉強を始め、後に洗礼を受けた。スープキッチン、こつした人と人との心の交流から始まったのである。

広報ファンデレイジング委員会

名古屋YWCA

名古屋YWCAの炊き出しの歴史は長いが、現在も週2回のペースで続く「スープキッチン」は、2002年、英語講師メアリー先生の好奇心と行動力から始まった。

ある日、メアリー先生は、通勤に使うバス停の近くに10人ほどの路上生活者が座っていることに気が付いた。「この人たちは、どういう人だろう」と見ていると、その中の一人が、誰かがゴミを捨てると拾ったり、バスが来ると邪魔にならないように指図したりしている。「この人がリーダーに違いない」と思ったメアリー先生は話をしてみたくなった。そこで通訳に名古屋YWCA職員を連れて行き、リーダーに「一番ほしいものは何ですか?」と尋ねると、「あつたかい食べ物」という。「じゃあ、明日からスープ届けようか」ということになり、それから先生と職員は毎日、毎日、日曜日以外、人数分のスープとパンを届けた。これが「スープキッチン」の始まり。「なぜ持つてきてくれるんだ?」というリーダーの問いに、メアリー先生は「私たちには神様がいます。教えにあるからです」と答えた。しばらくしてリーダー

名古屋
YWCA

好奇心から始まる
心の交流





クリスマス物語の主演イエスは、
やがて各地を旅して歩き、人々に出会い、
その中で救いや助けを求める人々を
「隣人」として受け入れ、愛しました。
キリスト教を基盤とするYWCAの活動も、
イエスが示した「隣人愛」に基づいています。
そんな地域の活動の一部を紹介します。

YWCA > となり ひと 隣人として



基本的に子ども一人にボランティア一人。
マンツーマンで寄り添います

ここはまた、支援する・される
関係を超えて地域で共に暮ら
す「近所同士」の関わりが
育まれる場。外国人への差別や
偏見が横行する現在、こうし
たセーフスペースが地域にある
ことこそが、社会への大切なメッ
セージとなると信じています。

東京YWCA職員 是常景子

東京YWCA武蔵野センターは、郊外の住宅街にある小さな
平屋です。ここで日本語を母語としない親のいる子どもに日本語・
学習を支援する「いちこの部屋」を開いています。週3回、子ど
も6〜8名とボランティア約10名で行っています。
宿題がしたい、いっぱい話したい、学校で分からないことを知
りたい、やることが分からないなど、それぞれのやりたいこと・
心配に思うことを聴き、共に取り組みます。勉強を嫌がる子も
いますが、一緒に過ごすことをあきらめず、子どもの隠れた願い
を探って寄り添うことで、少しずつ挑戦する気持ちが育まれてい
く、そんな場でありたいです。
保護者へのサポートも欠かせません。生活や学校の疑問に答え
たり、お茶を飲みながらおしゃべりに花を咲かせたりすることも
あります。ときに支援の対象ではない人が来所することもありま
すが、見放されたと感じないよう、適所につなげるようにしてい
ます。

東京
YWCA
武蔵野
センター

外国ルーツの
子どもたちと共に



会場の教会前には長蛇の列。
開始2時間前から並ぶ人もいます

2025年9月に満4年を迎え、48回目の配布を実施しまし
た。これまで続けてこられたのは、みんなでコツコツと助け合っ
てきたからです。世界は排除と分断の理論がまかり通っていますが、
わかちあい釧路は「お互いさま・寄り添う・共に手を携える」で
す。そんな想い・取り組みが波
紋のように広がり、今では物心
の両面で応援してくれる市民が
増えました。本当にありがたい
ことです。これからも「分かち
合う」この言葉を大事に伝えて
いきたいと考えています。

釧路YWCA 高橋ひろみ

「困っている人に食料品などを無料で配布しませんか」
「コロナ禍の2021年9月、日本バプテスト連盟釧路教会の牧
師からの緊急提案を受けて、教会と釧路YWCA、そして釧路
友の会の協働プロジェクト「わかちあい釧路」が始まりました。
一回目の配布では、社会福祉協議会やフードバンク、個人の協力
を得て食料や生活用品を詰めた袋を30用意したものの、受け取
りに来たのは15人ほど。知名度不足でした。そのうち新聞など
の報道で知られるようになり、8回目は60袋でも足りず、あわて
て追加を作るほどでした。コロナが落ち着いたら利用者も減ると
思いきや、増える二方です。じわじわと物価高になり、困っている
人が多いのです。

釧路
YWCA

地域に広がる
助け合いの輪



戦後80年目の「南京を考える旅」にて

善き隣人として 共に平和をつくろう

9月21日～25日、第5回「南京を考える旅」が開催された。日本から14名、中国から26名が南京で出会い、共に歴史を学び、思いを分かち合った。戦後80年を覚えて参加したメンバーに感想を寄せてもらった。



前事忘れざるは 後事の師なり

13年ぶりに「南京を考える旅」に参加する機会を得た。前回参加した2012年は、日本政府による尖閣諸島の国有化で、国交回復以降、最悪の日中関係と言われた時期だった。南京大虐殺犠牲者国家追悼日にあたる12月13日に合わせての訪中でもあり、緊張の中で旅を迎えたことを覚えている。

中国の参加者と共に訪れた侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館、ラーベ旧居、南京利濟巷慰安所旧跡陳列館では旧日本軍の加害の実態に「人間が同じ人間に対してここまで残虐になれるものなのか」と胸がえぐられるようだった。だが、このような時勢だからこそYWCAのような民間の草の根の交流



が大切であり、「前事不忘后事之師」過去の歴史を教訓としながら、共に東北アジアの平和のために種蒔きを続けていこうという中国の姉妹たちの言葉に救われる思いがした。

敗戦から80年となる今回もまた、訪中直前に天安門広場で大々的な抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利80周年記念式典があり、南京大虐殺や731部隊をテーマにした映画が公開された。一方、日本でも参院選で、南京大虐殺を「捏造」「フィクション」と主張する候補が当選するなど、歴史修正主義的な発言が後を絶たず、厳しい政治状況下での旅だった。そんな中、日本からの14名の参加者を中国側は万全の準備で迎え入れてくれた。私たちは「セーフスペース」で、中国全土から集まった参加者と共に講演を聴き、南

「南京を考える旅」とは

1971年に始まった「ひろしまを考える旅」の姉妹プログラム。2005年、日本YWCA100周年の記念事業の一環として実施した「ひろしまを考える旅」に招待された中国YWCA参加者からの提案を受けて始まる。日本のユースが南京の地を訪れ、中国のユースと共に歴史を学び、思いを語り合い、東北アジアの平和の実現に向けて交流することを目的としている。2007年に第1回の旅を開催。中国YWCA・日本YWCA主催、南京YWCA共催で2012年、16年、18年と回を重ね、コロナ禍を経て今回7年ぶりに実施した。

あわせて読もう

魅力満載！
旅のレポート

Column

京大虐殺や「慰安婦」問題について学び、グループで感想を分かち合い、一人ひとりが平和のために何ができるかを考えることができた。特に日頃から自らの興味・関心分野において活発に活動や情報発信を行っているユースが、高い目的意識を持ち、語学力を駆使して周りの人と積極的に交流する様子は頼もしく映った。

過去の出来事ではなく 今なお続く痛み

二度目の参加で感じたことがある。



侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館を案内してくれた通訳者の、「ここは南京大屠殺の史実を学ぶ博物館ではなく、被害に遭われた方々を尊び追悼する遇難同胞記念館です」という言葉には、とした。前回の旅では耐えがたい残酷な行為ではあっても、どこか「過去の出来事」のように感じていた。しかし前日の特別講演で大屠殺を経験した方々のトラウマやPTSDについての話を聞いたことで、80年経った今でも癒えることのない幸存者一人ひとりの身体と心の傷を自分に引き寄せ、自分の痛みとして捉えられたと思う。暴力は今、この瞬間にもガザで、ウクライナで、戦地だけでなく家庭で、学校で、



職場でも起き続けている。時計の針を戻すことはできないが、身近にある暴力にNO！とささやかな声をあげることはできるのではないかと。

善き「となりびと」になるために

この5日間、中国YWCAの归晓欣総幹事は何度も「中国と日本は隣人だから」と言われた。日本は古来、隣人の中国から多くのことを学んできた。それが1937年、北京の暗闇に響く1発の銃声をきっかけに日本はその隣人に襲いかかり、焼き尽くし、殺し尽くし、奪い尽くしたのだった。今回が2度目の参加となる中国側のある若い

女性とは、かつて愛国教育の影響で日本人が嫌いだったそう。だが、前回の旅で日本の参加者と出会い、語り合い、彼女の中で日本と平和についての見方が大きく変わったといい、再びこの旅に参加し、友だちの輪を広げていた。

両国のユースが同じ場所と同じ時間を過ごし、隣人に対する圧倒的な暴力と性暴力の実態を直視し、全身全霊で受け止めて、自分たちにできることを模索する。その中で、彼女のような友人を増やしていき、それぞれの場所に帰ってもその体験を伝えていく。「南京を考える旅」は、私たちが中国の人々にとって真の善き「となりびと」になるための旅でもあるのだ。

日本YWCA書記 吉田亜希



Column

中国YWCAの拠点・上海紀行

「南京を考える旅」に先立ち、9月19日～20日の日程で日本YWCAから5名が上海市を訪れた。中華YWCA全国協会（中国YWCA）は首都北京ではなく、租界時代から国際都市として栄えた上海にある。上海では中国YWCAとの関係が深い政府系の女性NGOの上海市婦人連合会を表敬訪問し、敷地内にある博物館で中国女性の歴史展を見学した。権利拡大、ジェンダー平等を求めて闘い、家庭・職場・党で活躍する女性たちのパワーを感じた。翌日は中国YWCA・YMCA本部を訪れ、中国に10ある地域YWCAの事業や、パートナーであるYMCAとの関係などを

伺った。日本YWCAのLA（ローカルアクション）にも通じる、地域YWCAの事業を中国YWCAが財政的に支援する仕組みが興味深かった。午後からは上海YWCAが運営するコミュニティセンターを見学。文化教室、デイサービス、ホールなどを備えており、地域のあらゆる年代の住民に親しまれていた。上海訪問で、あらためて日中のYWCAは民間・キリスト教基盤の団体としてこれからも共に平和の実現に向けて努力し、ユースの交流を継続していくことを確認することができた。



エンパワーするNGO



2025年度クリスマス募金のお願い

日本YWCAは、日本全国・世界各地のYWCAとつながり、
弱い立場におかれがちな女性や子どもたちを支援し、
その声を社会に伝えるために活動しています。2025年のクリスマスを迎えるにあたり、
2つの活動へのご寄付を心よりお願い申し上げます。

オリーブの木キャンペーン募金（一口4,000円～）

日本YWCAは、イスラエル軍や入植者に脅かされるパレスチナの土地にオリーブの木を植える「オリーブの木キャンペーン」（パレスチナYWCAと東エルサレムYMCAの共同事業「JAI」が実施）を支援しています。オリーブの木はパレスチナの人々にとって生計の手段であり、貴重な栄養源。そして繁栄と幸福のシンボルです。オリーブの苗木を寄付することで、パレスチナの農家を支援、国際的な連帯の声を届けることができます。一口4,000円で1本の苗木を植樹できます。寄付者には現地団体から証明書が発行され、植樹記念のプレートに名前が刻まれます。お名前の読み仮名をローマ字表記で必ずご記入ください。

ピースメーカーズ募金

日本YWCAは「平和を実現する人々は幸いである（新約聖書マタイ5章10節）」をテーマに、一人ひとりがピースメーカー（Peacemaker）として平和をつくりだす活動を展開しています。特に若い女性たちに、国内外でリーダーシップを身に付けて発揮する場と機会を提供することで、一人ひとりの若者がエンパワーされ、平和をつくりだす力を得ることを目指しています。ピースメーカーズ募金は「国連女性の地位委員会（CSW）派遣」（ニューヨーク）、「日韓ユース・カンファレンス」（韓国／日本）、「ひろしまを考える旅」（広島）などに用いられます。

お振込み先

郵便振替 00170-7-23723

加入者名 公益財団法人日本YWCA

*通信欄に「クリスマス募金（ピースメーカーズ）」「クリスマス募金（オリーブの木）」のいずれかをお書きください。

銀行振込 三井住友銀行 飯田橋支店 普通 1198743

口座名義 公益財団法人日本YWCA office-japan@ywca.or.jp

*下記のアドレスに①募金の種類、②お名前、③ご住所をお知らせください。

インターネット 日本YWCA公式サイトから、クレジットカードを用いてご寄付いただけます。

<https://www.ywca.or.jp/getinvolved/donate/>


フォロー
してね

セーフスペース・カフェ
「ここ*LOCO」
女性のための居場所です

Instagram



WEBサイト



敬称略
(2025年8月16日～10月15日)

匿名
実生律子
基金

日本YWCAユースエンパワメント
匿名
ブル学院中学校・高等学校

東日本大震災被災者支援募金
細川敦子

宇佐美英俊 鶴崎祥子

（オリーブの木キャンペーン募金）
宇都宮芳子 熊江雅子 桑原貴子
田中良明 根岸朋子 福澤レベッカ
三橋伸子 宮田ゆう子 安川美歩
Yokoguchi 吉岡真紀子

（ウクライナ支援）
嘉屋陽子 手島正広

（パレスチナYWCA支援）
浅野勇介 上野真由美 黒木理恵
牧甫 宮入健郎 宮崎せい子
安川美歩

（国内外の災害被災者支援）
熊江雅子 桑原貴子 馬場元毅
福澤レベッカ 細川敦子 牧甫
山本貴美子

（オリーブの木キャンペーン募金）
宇都宮芳子 熊江雅子 桑原貴子
田中良明 根岸朋子 福澤レベッカ
三橋伸子 宮田ゆう子 安川美歩
Yokoguchi 吉岡真紀子

（ウクライナ支援）
嘉屋陽子 手島正広

（パレスチナYWCA支援）
浅野勇介 上野真由美 黒木理恵
牧甫 宮入健郎 宮崎せい子
安川美歩

（国内外の災害被災者支援）
熊江雅子 桑原貴子 馬場元毅
福澤レベッカ 細川敦子 牧甫
山本貴美子

（オリーブの木キャンペーン募金）
宇都宮芳子 熊江雅子 桑原貴子
田中良明 根岸朋子 福澤レベッカ
三橋伸子 宮田ゆう子 安川美歩
Yokoguchi 吉岡真紀子

（ウクライナ支援）
嘉屋陽子 手島正広

（パレスチナYWCA支援）
浅野勇介 上野真由美 黒木理恵
牧甫 宮入健郎 宮崎せい子
安川美歩

（国内外の災害被災者支援）
熊江雅子 桑原貴子 馬場元毅
福澤レベッカ 細川敦子 牧甫
山本貴美子

（オリーブの木キャンペーン募金）
宇都宮芳子 熊江雅子 桑原貴子
田中良明 根岸朋子 福澤レベッカ
三橋伸子 宮田ゆう子 安川美歩
Yokoguchi 吉岡真紀子

（ウクライナ支援）
嘉屋陽子 手島正広

（パレスチナYWCA支援）
浅野勇介 上野真由美 黒木理恵
牧甫 宮入健郎 宮崎せい子
安川美歩

（国内外の災害被災者支援）
熊江雅子 桑原貴子 馬場元毅
福澤レベッカ 細川敦子 牧甫
山本貴美子

（オリーブの木キャンペーン募金）
宇都宮芳子 熊江雅子 桑原貴子
田中良明 根岸朋子 福澤レベッカ
三橋伸子 宮田ゆう子 安川美歩
Yokoguchi 吉岡真紀子

（ウクライナ支援）
嘉屋陽子 手島正広

（パレスチナYWCA支援）
浅野勇介 上野真由美 黒木理恵
牧甫 宮入健郎 宮崎せい子
安川美歩

（国内外の災害被災者支援）
熊江雅子 桑原貴子 馬場元毅
福澤レベッカ 細川敦子 牧甫
山本貴美子

（オリーブの木キャンペーン募金）
宇都宮芳子 熊江雅子 桑原貴子
田中良明 根岸朋子 福澤レベッカ
三橋伸子 宮田ゆう子 安川美歩
Yokoguchi 吉岡真紀子

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax. 03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 藤谷佐斗子／偶数月1日発行

旬な情報発信しています メールマガ登録 y-net@ywca.or.jp にお名前を送ってください フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan